

# 大海原を滑空する フライイング・フイツシュ

大きな胸びれを広げて海上を滑空するトビウオの群れ。まさに「Flying Fish」と呼ぶにふさわしい魚です。流線型の魚体の後端には、下部が長く伸びた尾びれがあり、それを左右に懸命に振りながら上体を起こし、水中で速力をつけると水面をたたきながら海の上へと飛び出していきます。主翼となる胸びれに加え、左右にかじを取るための水平尾翼となる腹びれを持ち、長いもので数百メートルの距離、海上を滑空します。胃はなく、短い消化管を持ち、大きく発達したうきぶくろを備えている理由は、体を軽くして飛びやすくなるためだといえます。

日本周辺では現在、実に三十一種ものトビウオ科魚類が知られています。温暖な海に多く、長崎県沿岸には、船曳網や定置網で漁獲されるツクシトビウオ、ホソトビウオ、ホソアオトビに加え、さまざまなトビウオ類が生息しています。倉場（トーマス・グラバー）氏は、本図譜の魚名を「トビノウヲ（*Cypselurus agoo*）」、方言として「あご」と記しました。トビウオが網で取られるから網魚と呼ぶのか、「あ」が愛賞語なので「うまい魚」の意味なのか、さまざまな説があり確かなことは分かりません。長崎県の北松浦郡では、全長十五センチほどの小さなものをあご、成魚をおおごとと区別

ごだしは、脂質が少なく淡泊な素材を生かした九州の名産品。こしが強くねっとりした食感のトビウオですが、味はあっさりしていてくせがなく、深く濃い甘味とうま味があり、旬の新鮮なものなら刺身でも煮ても焼いてもすり身にしても美味です。凝縮したうま味を堪能できる丸ごとの姿揚げは見栄えも良く、干物や焼きあごは、だしにおやつにお茶漬けにと地域の人々に親しまれてきました。

## ホソトビウオの 命名者

図譜に描かれたトビウオは、一九二一年五月に長崎魚市場で採集されたと記録されています。ホソトビウオが魚類分類学者の阿部宗明先生（一九一〇～一九九六年）により新種として報告されたのは一九五三年のことで、当時はまだ知られていませんでした。阿部先生は農林省水産試験場で勤務を始めた一九四七年から八十五歳で亡くなるまでの四十九年間にわたり毎朝、築地魚市場の広い場内をくまなく見て歩き、魚類の研究に取り組んだだけではなく、築地で出会う世界各国の船員さんと話をするために様々な国の言語を勉強していました。また、二百種もの輸入魚に和名を付け、「新顔の魚」として紹介することで魚食普及にまで大いに貢献された方です。その先生が、亡くなる直前まで研究されていたのが

して呼びます。シーボルトが長崎から持ち帰ったトビウオの標本を基準に学名が命名された際、彼がメモした地方名「あご」が種小名「*agoo*」の由来となつたのは確かなことです。

グラバー図譜全八〇六図のうち、トビウオが描かれたのは一枚だけでした。図譜を基にあらためて検討してみると、ハマトビウオ属の一種であることに間違いなく、胸びれの先端が背びれの基底後端に達していないこと、胸びれの色や模様などから、ホソトビウオと同等できます。ホソトビウオは、最大全長三十センチ未満の小型の種で、北海道以南の日本海・東シナ海や千葉県以南の太平洋沿岸に分布します。

## あごの食文化

トビウオが取れるのは一年を通してわずかな時期だけです。産卵のため沿岸に集まることから春告魚とも呼ばれ、春に成魚を、秋には小型の幼魚を主な対象として、大規模な漁が行われてきました。トビウオの卵は、海藻に絡まりやすくするための纏絡糸と呼ばれる細く長い糸を備えており、一つの卵に五十本ほどの纏絡糸が確認されています。しかし近年は産卵期になってもトビウオが浜に大挙して来ることがなくなつたといえます。各地で藻場が減少したため、産卵基盤を失ったトビウオが減少しても不思議ではありません。汁物だしの中では最高と評されるあ

トビウオでした。

阿部先生が亡くなる一、二年ほど前、大学院生だった私に、先生のお手伝いをする機会が巡ってきました。築地のおさかな普及センターにあった先生（当時、名誉館長）の研究室には、所狭しと積み上げられた資料と共に、種々のトビウオがぎっしり詰まっていたくつもの木箱が無造作に積まれていたものです。慌ただしい早朝の築地。四方八方からやって来るターレ（運搬車）に注意を払い、狭い通路を忙しく走り回る市場の方々の邪魔にならないように大慌てで場内を歩くのが常でしたが、阿部先生の後ろに続いて歩くと、市場の皆さんが「先生、おはようございます」と次々に手を止めて直立し、道ができていくのには驚いたものです。阿部先生は、トビウオを丹念に調べながら、「まだまだやりたい研究があった、時間が足りないんだよ」と口癖のようにおっしゃっていました。トビウオを見ると、今でも阿部先生との素敵な時間を思い出します。

※グラバー図譜では倉場（グラバー）氏によりトビノウヲ（*Cypselurus agoo*）と特定され、長崎大学水産学部が発行したグラバー図譜（巻一九七三年）ではハマトビウオ属の種と特定されました。今回、専門的な見地からホソトビウオ（*Cypselurus hirai*）と特定しました。



解説 山口敦子  
長崎大学水産・環境科学総合研究科教授  
YAMAGUCHI Atsuko  
東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。  
2000年から長崎大学。専門はエイやサメなど魚類学と水産資源学の研究。主な著書に「干潟の海に生きる魚たちー有明海の豊かさと危機」（東海大学出版）など。



Glover Atlas

# ホソトビウオ

*Cypselurus hirai*  
画家 小田紫星

グラバー図譜

日本西部及び南部魚類図譜

Fishes of Southern  
& Western Japan

グラバー図譜は一切の引用  
および転載を禁止しております。

長崎大学附属図書館のホームページでもご覧いただけます。

<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/GloverAtlas/>

「グラバー図譜」は、長崎の実業家であった倉場富三郎氏が編集したコレクションです。日本四大魚譜の一つといわれています。